源氏物語宇治十帖の研究

藤村潔著

源氏物語宇治十帖の研究

藤村潔著

源氏物語字治十帖の研究

定価二二〇円

昭和三十一年一月二十五日　印刷
昭和三十一年二月一日　発行

著者　藤村　潔

高松市南新町八一ノ四
発行者　上田千一

高松市南亀井町四五
印刷者　牟禮政次郎

発行所　高松市丸亀町通五丁目　株式会社　上田書店

目次

序説……一
一、紫上—物語作者の悲劇……七
1. その理想性……七
2. 蜻蛉日記との関係……一三
3. 紫上の人柄……二三
4. 物語作者の悲劇……二八
二、宇治十帖の世界……四〇
1. 美と誠実と不信の世界……四〇
2. 八宮……四二
3. 大君……四四
4. 中君……五二

5. 浮舟……五七
6. 薄明の世界……六五
三、夕霧の子息達……七〇
1. 甲と乙の二つの本文……七〇
2. 君達の官位……七四
3. 蔵人の少将……七八
4. 各巻相互の関係……八三
四、竹河、紅梅、宿木……九四
1. 命短き族……九四
2. 竹河、紅梅……一〇三
3. 竹河巻の「類似」及び「偽作」について……一一三
五、蜻蛉の巻について……一三四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

六、手習、夢浮橋……一三九
1. 横川の僧都……一三九
2. 永遠の女性……一四二
結語……一四九

序説

源氏物語の第三部といわれる宇治の物語について池田亀鑑博士は「新講源氏物語」の中で、「第三部は荘園と僧庵との文学である」とされ

第二部が死の文学であるとすれば、第三部は死を超えるもの、絶対の救済をもとめて苦しむもの―もちろんそれは肉体的な死を克服して、さらにより大きな悟りと平安をもとめて苦悶するものであるが―そういふものの文学である。

と規定され、また

第三部は小野で剃髪した浮舟が薫の君の使者の小君をかへして思ひに沈むところでをはってゐる。このうら若い女主人公が仏にすがって大悟するか、または再び人間の世に下りるか、そこにはなほ疑問がのこされてゐる。心霊の世界に安住しえたか、現実の世を恋うてその矛盾の中になほ苦悶の生活をつづけるか、それはこゝでは謎として残されてゐる。作者は何等解決を下してゐない。おそらく、それは式部自身でも解決しえない課題でもあった。

と述べられている。

宇治十帖が荘園と僧庵との文学であるという見解には異論はない。物語は平安京と宮廷をはなれて荘園と僧庵で展開されて居り、その展開の場に、第一部及び第二部に見られない特徴を指摘し得るからである。しかし源氏物語の第二部が死の文学であるとすれば、第三部は死を超えるもの、絶対の救

済を求めて苦しむもの――そういうものの文学であるという見解には疑問をさしはさむ餘地があるように考えられる。宇治十帖の物語はまだ問題をそこまで進めてはいないように思われる。浮舟の将来について博士のいだかれた疑問は第三部を上述のように死を超えるものの文学と解する限り、当然の疑問であって、それらの疑問は作者もまた解決し得ない課題であったに相違ない。しかし作者はそのような疑問を解決すべく浮舟を描いたのではなかったようである。作者は浮舟をもって宗教の門を叩かせたのではなく、もっと違った意味をもって浮舟を描いた、或は描いてしまったように思われる。浮舟が心霊の世界に安住しえたか、現実の世を恋うてその矛盾のなかになお苦悶の生活をつづけるかについては、作者は何一つ語ってはいない。その問題は将来必ずもちあがって来る問題であり、その解決は将来において必ず求められなければならない課題ではあろうが、それは物語の現在の問題ではなかったようである。そのような問題は宗教の領域に属するものであって、物語の対象とはなり得なかったのではあるまいか。（「雲隱」の巻が巻名だけであって本文のない点は一つの参考となり得よう）少くともこの物語の作者は、宇治の物語ではまだ、死を超えて絶対の救済を求めつゝある形象を創造してはいない。

森岡常夫博士の「源氏物語の研究」によれば

人間と運命との位置は、源氏の世界から宇治の世界に至って顚倒したのである。

として、匂宮以下十三帖には人々の背後に運命が描かれていると説かれている。たしかにそこには運命的なものが描かれているように思われる。が、問題は何故源氏の世界から宇治の世界に至って人間と運命との位置が顚倒したのかという事である。私はそれが知りたい。

生きた人間の社会に見出される運命にはそれ自体に大きな意味がある。それは人間生活の現実の姿だからである。しかし物語の世界に描かれた運命はそれ自体としては意味をもっていない。何故作者がそのような運命を描いたか、或は描かなければならなかったかという点に、物語の世界の運命の意味と価値が認められるのである。私は宇治の物語に描かれた運命的なものの意味を究明したい。

武田宗俊氏は氏の「源氏物語の研究」に於て

此時代の趨向たる厭世的、宗教的傾向を一身に体する人物、又時代の一面を示す享楽的人物、美しくも弱い性格に自ら悲劇的運命を招く女、之等の人物の織りなすあわれ深い事件運命、之を描くことが第三部の意図であったろう

と述べられ更に

第一部は理想主義的態度によって描かれたが、その理想は高いとはいえず、第二部は写実的態度によって現実の苦悩をうつして漸く真実にせまり、第三部にいたって、個の中に時代をうつし、時代を超えて人間の永遠普遍をうつして、最も深い意味での象徴的真実に達したといってよいであろう。

と結論されている。あわれ深い事件運命が描かれているという点について勿論異議はない。そのあわれ深い事件運命の中に時代が反映しているという氏の見解に対しても同感である。ただ私は「最も深

い意味での象徴的真実」をこの物語の構造に即して、論理的に解明したいのである。

秋山虔氏は「浮舟をめぐっての試論」（国語と国文学三三五号）の中で宇治十帖の本質に具体的にふれて

実に作者は、八宮の家庭を歴史的具体的に描き出すことによって、登場者の地位、境遇、教養、資性、及びそれに相応の意識心理の対応関係の、複雑なそして必然的な絡みあいの中に、人間同志がすでに信じきれなくなっている或いは不信を通してのみ人間関係の成り立っている倭少卑俗な貴族社会における処世のいとなみを、それのもっとも集約的にあらわれる愛情の問題において描きすすめて行くのである。

として、注目すべき論旨を展開されている。私は氏がいみじくも指摘されたこの物語の作者の現実認識の深化と発展の中に、作者自身どうする事も出来なかった彼女のローマン精神が、時代と共に苦悩する姿と、その悶えをあとづけたい。

物語とは概念をもって人間の精神の中に一つの小宇宙をつなぎとめることである。従って我々は言葉の概念にのみとらわれていてはならない。言葉が我々の内部に喚起し、つなぎとめたところのものをみつめなければならない。そこには一定の秩序があり統一がある。この一定の秩序と統一の故に我々はそこに小宇宙、小世界を感じるのである。物語の世界に統一をあたえているものは創作主体即ち物語の作者の精神である。物語の研究にあたって、我々はこの作者の精神を明確に認識しなければならない。それは多くの場合困難な作業ではあるが不可能ではない。物語の世界は、それがどのように大きな、そしてどのように複雑な世界であっても、それは一筋の時間の上に展開の契機をもっている

のであって、同一時間に二つの語が語られる事はあり得ない。物語られてしまった世界は一つの小宇宙を構成して自ら回転するのであって全く手のつけようがないのであるが、幸いな事に我々はこの小宇宙が構成される過程は一筋の時間の流れをたどってとらえる事が出来る。我々が物語展開の契機を時間的にたどって、その物語の構造を明らかにする事が出来るならば、我々は比較的容易に、また比較的正確に、創作主体に迫り得るのではなかろうか。作者の精神を論理的に認識する事は、物語の世界の本質を解明する事にもなる。そしてこの場合、注意すべきは、作者といえども、常に、物語の世界に統一をあたえているもの即ち作者の内部にあるものに対して、明確な認識をもっているとは限らないという事実である。我々は自巳の判断や行為の特徴・傾向を他人に教えられる事があまりにも多いのである。

物語の構造を明らかにする事は物語研究の一つの有効な手段であって、それ自体が物語研究の目的ではない。従って物語の構造の解明はすべての物語に必ずしも必要な事ではない。物語の中には物語の構造という用語すら必要としない程単純な構造のものも少くない。方法と、その方法によって究明しようとする対象とは常に相関関係に立っている。正しい方法は常に、対象の正しい本質直観によって導かれ、対象の正しい本質の論理的認識は、正しい方法によらなければ確立が困難なのである。

宇治の物語は、源氏物語の所謂正篇に比較して登場人物も少く、展開される各事件や場面の相互関

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

係は緊密であって、一つの水源から滾々と湧出してあふれ、流れ去る趣がある。しかしその構造は綿密に吟味してみると決して単純ではない。一つ一つの事件や場面は精巧な機構の歯車のようにかみあって、物語の世界を押し進めている。この物語の構造は予想以上に複雑である。

一　紫上――物語作者の悲劇

1　その理想性

源氏物語は一大理想小説といわれ、また一大写実小説と考えられている。光源氏がこの物語の男性主人公であるという事については、殆んど異議がないと思う。桐つぼ帝と桐つぼの更衣との前世の深い契りによって生れ出たこの主人公は「世になく清らなる、玉の男御子」であって、生れながらにして「珍らかなる児の御容貌」にめぐまれていた。「いとどこの世の物ならず清らに」成長したので、父帝は「いとどゆゝしう」お思いになる程であった。光源氏はまた「いみじき武士、讐敵なりとも、見ては先づ打笑まれぬべき様」をしていて「わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし」、言ひ続けて行くと「うたてぞなりぬべき人の御様」であったと敍述されている。そこには作者の最高の讃辞が捧げられている。（桐つぼ）

源氏君は殆んど無条件に物語の世界に登場せしめられた理想の男性主人公であって、その形象には多分に作者の美と高貴に憧れるところのロマン的傾向を指摘する事が出来る。（註）ただ、こうし

たローマン的形象の物語世界への登場が、母更衣の死や、祖母の死や、帝と更衣との悲恋などできびしくとりかこまれている点に、多少の現実の抵抗が見られる。

藤つぼもまたこのような女主人公であった。即ち源氏君と殆んど同じような意味に於てローマン的な理想性を担って物語の世界に登場せしめられた女主人公であった。

世に類なしと見奉り給ひ、名高うおはする宮の御容貌……（一ノ二一）（岩波文庫本の巻数と頁数、以下同じ）

とあって、源氏は「光君」とよばれ、藤つぼは「耀く日の宮」とよばれた。

紫上は若紫巻で

中に十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなれたる着て、走り来たる女子、数多見えつる子どもに似るべくもあらず、いみじう生ひ先見えて、美しげなる容貌なり。髪は扇を広げたるやうにゆら〳〵として、顔はいと赤く擦りなして立てり（一ノ九五）

として登場せしめられる。以下幼い紫上を描く筆致はきわめて短い章句の内に、あどけない姿が躍如としていて、印象が鮮明である。例えば病いえて山寺を降った後、源氏が再び尼君のもとを訪ねた時の

「いでや、万づ思ほし知らぬ様に、大殿籠り入りて」など聞ゆる折しも、彼方より来る音して、「上こそ。この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見給はぬ」と宣ふを、人々いと傍痛しと思ひて「あなかま」と聞ゆ。「いさ見しかば心地の悪しさ慰みきと宣ひしかばぞかし」とかしこき事聞き得たりと思して宣ふ（一ノ一一〇）

という数行は、読む者をして思はず微笑せしめないではおかないであろう。どこの家庭でも、子供のあるところでは経験するに違いないほゝえましい情景の一コマではあるが、描かれてみごとである。こうした子供の世界の描写は何も紫上の幼年時代のそれに限られた事ではなく、空蟬のもとに源氏をしるべした小君や、夕霧や雲井雁の幼い時の姿、薫や匂宮の幼時のあどけない言動、紅梅巻の按察大納言の若君や、薫の使者として小野に浮舟を訪ねる小君を無造作に描いた筆致についてもいえる事であって、子供に対する強い愛情とともに、成長してやまない子供の世界のもつ無条件の明るさが、作者の心をあたたかく、あかるく照らしたためであろう。子供が姿を見せるところ、必ず物語の世界は明るくなっている。罪の子といわれる薫の場合も決して例外ではなかった。こうした愛情と未来に向ってひろがる明るさが作者に及ぼした影響は紫上の描写についても認める事が出来る。華やかな生活を写して、どうかすると暗いかげを拡げるこの物語で、紫上を描く筆づかいは妙に明るい。武田宗俊氏は、玉鬘系後記説の展開にあたって玉鬘系の物語に対して紫上系の物語が楽天的で明るいとされ、その事を玉鬘系後記説の一つの論拠とされている。それに対して、紫上系物語は決して楽天的でもなければ明るいともいえないとの反論もあるが、紫上系物語がすべて楽天的で明るいとはいえなくとも少くとも紫上を写した筆致は明るく、ある程度楽天的である事実は認めざるを得ないと思う。源氏も藤つぼも高い理想として描かれているが、彼等をとりまく雰囲気は必ずしも明るいとは言いがたい。

斯うした両者の相違は、作者がこれらの人物に課した理想性の相違と愛情にその原因を求めなければならない。

紫上が作者に対して担っていた理想性は、源氏や藤つぼの宮が担っていた理想性と等しいものではない。源氏や藤つぼは作者によって殆んど無条件的に設定された、ローマン的色彩の強い主人公達であったとすると、紫上は作者が、身を置いていた時代と社会の現実に立って、積極的に創造を試みた理想の形象であった。ローマン的理想の形象といい、現実に立脚した理想の形象といい、比較上の問題であって、ローマン的理想の形象であるからといって、源氏や藤つぼに全く現実性が顧慮されていないという意味ではない。源氏と紫上とを較べて見る時、前者にローマン的傾向が強く、後者に現実的傾向が著しいという意味である。

紫上は物語の世界に於て、紫のゆかりとして、その位置の安定を得ているのであって、その限りにおいては、ローマン精神に支えられて物語の世界に登場せしめられているとしなければならない。しかしこうした条件も比較上の問題であることは勿論である。桐つぼ帝と更衣との結びつきは、この物語の一つの重要な前提であって、そこには宿命的な意味以外の他の意味を認めがたい。そして、こうした宿命的な悲恋の中から源氏の君が生れて来るのである。（源氏を支えるこの前提については長恨歌の影響であると説かれているが、それは影響というより、借用という方がより相応しい。）一方藤つぼは亡き更衣に姿かたちが非常

に似ているというゆかりから、物語の世界に登場するのであって、紫上が血縁関係をくさびとして、藤つぼのゆかりの人として登場する事と比較するならば、藤つぼと紫上との関係は、更衣と藤つぼとの関係に対して、より現実的であるといえるのである。紫上の以上観察を加えたような、物語の世界への登場の仕方には、ローマン的傾向と共に、より一層強く示された現実的な傾向を否定する事が出来ない。物語の世界に姿を現わした紫上は教育という一つの大きな抵抗を経て、理想の形象性を獲得するのであって、そこに、作者によった歴史的、社会的現実に立って積極的に追求された理想性を紫上に認める事の根拠がある。

……人々の苦しと思ひたれは、聞かぬ様にて、真実なる御訪らひを、聞え置き給ひて帰り給ひぬ。実に言ふ甲斐なの気はひや。さりとも、いとよう教へてむと思す。（一ノ一一〇）（傍線筆者、以下同じ）

源氏の君は若紫巻で紫上を思うように教育しようと思い立つが、若菜上巻では

対の上の御有様そ猶有り難く、我ながらも生ふし立てけりと思す。一夜の程且の間も恋しく覚束なく、いとゞしき御志の増るを、なと斯く覚ゆらむと、ゆゝしきまてなむ。（三ノ一七二）

とあって、その努力は結実して、あらまほしい理想の形象として、男君によってその教育過程が回顧されている。

紫上は世の人々から「幸人」とよばれた。若菜下巻には

いとゝみじき事にもあるかな。生ける甲斐ありつる幸人の光失ふ日にて、雨はそぼ降るなりけり。（四ノ四四）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com